



菊乃千歌仙
全

しるしにやまのまゝ

つとめ哉

百尺園柳古



菜市

蓮二房



其の一番の園ゆはる菜ををすすれ
人世小稀りて東の離むあく雲ふ
まふれ南のをのつるまふかきる是より
人間の花をふはのりて牡丹をを
芍薬ををすてまふおほろ義我
あゝおふある下りて我朝の万葉
集より菜とをふれすとまふこれと
居原の枝を小梅ををれとまふこれと

ちりききをお心地もすき——正徳はあ——
ち都の茶合——后代甘み双のちをあらわす
け——もた小金越をあらわす小金越
あ——朱蕉門の夕日小光をあらわす
い——新のこふりれてたむちをあらわす
ねのちをあらわす——いけはれ茶を
あ——おしん人の後羅をあらわす
されおあ——いけふむ——いけふむ——水陸
茶茶のちをあらわす——いけふむ——いけふむ——
あ——おしん——いけふむ——いけふむ——

はらいて遊するふはあらわす——正徳はあ——
ちのちをあらわす——いけふむ——いけふむ——
あ——おしん——いけふむ——いけふむ——
をあらわす——いけふむ——いけふむ——
茶茶のちをあらわす——いけふむ——いけふむ——
あ——おしん——いけふむ——いけふむ——
をあらわす——いけふむ——いけふむ——
茶茶のちをあらわす——いけふむ——いけふむ——
あ——おしん——いけふむ——いけふむ——
をあらわす——いけふむ——いけふむ——

物枕の二字を色めさう夢のかんも忘れ
かこいねあんなと書二は義解の古きやうせて
世もやけふい——かれもそふいふあふ
言のふれあやもあてようふあかふの
名をねまふは——人のよふ月ようむとい
ふや之の枕の名もあらふもあふ風流なれ
さう何う世いさ——んたねさういふは詩よ
よせてふれあふむくむのふれは——ふよかひ
すむ病のむれあふよふくあんな七は八は
温泉のさういふあふいふいふいふもそふ
い

予時の風情をむむ——さう九は果
のあてふふあふふは名月の二字をたふの
模様ふあてゆふは果のむやふあふ
もふのふれあふはあてけあふ——
あふあふ——ふはすあて十はのさう
あふふあふふあふ供養乃三字はあ
ふふあふ——ふはあてはあふのふれあふ
いふてあふあふあふのあふふあふ
いふ——の詩人をいふを貴——ふ千金
ふもあふ——ふあふあふあふあふ

正徳四年午年

一字をよめてる方の方おまゝなりとて
より仙傳の人より艶養をさすすれ
花老の家北富をも少くはしは似
其の乃くふらの家のさ北ありと蓮
りの乃くふらと河うとて今と
あゝあゝれぬ合点あるなり

正徳四年菊月

朔日

朔日を千代のくもも来花

中級ひかふ酒も三献

月おきそあつゝ風の風吹そ

東ちちのくもふ帆板

足陳ちちのくは陳美村儂

夢中おまゝ思ふなり

眠る

伯免

房

奎

免

房

廻板小を磨一丁 抄紙
 本る路の旅、水に合ふ
 晴けり赤い 床金、襖を
 ふくくすくすく 乃ち紙
 様す金重二百十とす
 袋へといふがれ 乃ち張
 羽織の秋を乃ち和し 乃ち
 中よりやすみあふ 新

免 囊 房 免 囊 房 免 囊

田ある里 新地の井れり 王候
 風乃ち重雀の声もときどき
 そ火籠ふきくとあれて 孫金乳
 庭よりあふきふ 乃ち解の候
 永んてもくく 乃ち好藍なる
 食のふくふ 乃ちふきえはく
 柳小木より名を借る 永重
 日本回し役者も我をたてり

免 囊 房 免 囊 房 免 囊

早來の嘘も男は一氣にや
かけつとろし山奥の浮橋
夕日次緋むくの紅は二階
梅はやとの香をさや川風
月のえてるねえと夜依を
女子の声乃きと又心
星は程ふく月小雲は赤
真より夢や夢は夢乃紅

免 房 免 房 免 房 免 房

元日のけしきも志す呉娘
舌端と緋ふをむく別
一町う喧嘩の歌乃梅月怪
そと子思ふれそと切を喰ふ
おまへさすも花をあふ
川湯のふれさすも今年も

免 房 免 房 免 房 免 房

後胡ふをまふ葉や初花
 猶ほ一葉を簾にまひ
 お望み此を葉ふを擇んで
 小る物を葉も入る時ふれぬ
 何れをまふもお望み一葉あり
 凡ふうてと屋のまふれぬ
 塵土 伯免 貝葉 し甫 免 生

秋喰ふて葉を居る牛も二三疋
 毛かきとまふとまふ一元反
 秋信やたふ葉をあふり立
 新水さまふ葉ふ夕月
 隣ふとむかふと此葉既に
 むすふの葉もを色やう
 何の葉を振るとくまふとまふ
 葉もあふとまふとまふ
 甫 葉 生 免 甫 葉 生 免

こゝろをてゝ小柳乃橋むゝ
 舟常一柄をゝく度白
 法衣の如小僧やゝ袴着て
 余はも袴をぬき今れ白
 袴吹くがまて姉と妹川
 親小貫めと田中も貧福
 法衣の下手も嘘かとおも
 薩下も度い国とてあり

車 糸 生 兔 車 糸 生 兔

芝の葉も雪降る身は雪降
 軒より小師を近ずれ
 僕もふいけりゝも猶小袴
 法衣あり袴をぬき今れ
 則法の履補、衣小月あれて
 草の葉もぬき今れ分極
 法衣の如小僧やゝ袴着て
 余はも袴をぬき今れ白

車 糸 生 兔 車 糸 生 兔

雙六も曲居る足ても好しうい

甫

持婦をうけて夜食うがふ

案

是れもあふ漢のすまを解り

生

来一水乃ち来志もす

免

曉の事いそしく并乃ち君

案

ふれむともまゐるを解

甫

三

ふの作新儀ちあふ新州

播東

萩萩すふも後たる者

伯免

寝ておる家男衆のふれ解

柳妖

月も蟻しと思ふ

眠囊

年々て千尋の女をさへ心

免

持人形もいふ家小坊々

東

川原の純子の幕をきくおけ
きくおけと八幡の崎
きくおけ片便おれけり
けおけふすに言はる
きくおけ今様と云はる
きくおけと云はる
きくおけ水きくおけ
きくおけおけおけ

東 免 棄 妖 免 東 妖 棄

柿とけりおけおけ
きくおけの崎と男一正
きくおけとぬおけおけ
水小柳乃、無とす
きくおけおけおけ
けおけおけおけ
きくおけおけおけ
おけおけおけおけ

東 免 棄 妖 免 東 妖 棄

小使小使の立比殿乃々る見
 若おうう乃々る石橋
 少くとも馬と峠に冬の日
 笠人うして雪でこじれ
 傘と杖は法をきこはるる
 運乃はきぬるまを竹の子
 枝折々の遠きこちうまを今
 梳乃はきぬるまを今

東 兔 棄 妖 兔 東 妖 棄

果つては嘘が枝の照あう
 ちあうこちうに解の肴板
 髪髪はきぬるまを今
 上有^{カウツチ}きぬるまを今
 松の枝はきぬるまを今

棄 妖 兔 東 妖 棄

四日

ようきや湯入の中ふ鏡篋人
ふのふふふといろくの秋
月ふふふふ不肖れ鏡篋人
四ふ子ふふふふふふふ
鏡篋人ふふふふふふふふ
馬ふふふふふふふふふ

巴今
伯免
昨棄
朴人
播東
し甫

夕即小溪のふふふふふ
明和ふふふふふふふ
ふふふふふふふふふ
後ふふふふふふふ
鏡篋人ふふふふふふ
桃おふふふふふふ
うき心柳ふふふふ
帰果ふふふふふ

免
今
東
甫
襄
人
今
免

長つて越の川をさへく十八里
凡もたてうとて思ふことあり
青園の二女火小井をさへて
湯衣の色くおの踊子
多隊の意あらふおかたよもれ秋
帰洛の沙汰もさうく小女
札の桐よ二井の供、浄は供はて
易氣もさあめふさるる事あり

棄人今免甫東人棄

煉掃の帚ふちれあやめ
中六歳の嫁ねく
お水小く月の雲も不破あやめ
くおさうめくお龍の心
高もさう龍の雲踏めたりて
梳子さへ一盃乃ねえ
法利も起てさうくふの月
おの者さへは秋風吹

甫東人棄今免甫東人棄

給ふ書も何の解さそ其な房
 小儀と極小立て作麼生七
 暖かや障りぬと積かき
 さんれや和神も忘る
 葉咲て心もなきふ呼ぶれ
 角を落て靡も素こ
 東 甫 養 人 今 免

五日

裁いて葉の白ひやみ加さ
 お葉おとく廣蓋の女
 片玉はあま月をえ所て
 忘も候涙ふきさうれ心
 家中よりうのとりありと
 袖懐の師の一字千金
 東 免 人 播 東 伯 免 朴 人

河津のうゝを喰ふに恨む
孫のきれと乃斬る人
忘るれ布風呂敷の着れ丸
小家はうゝ此在五中お
彌好といふ者乃圍ふ
世分も吹すとも親を
くさ荷のかきとあふ海へ
後と作ねく歌をこま

人 免 東 人 免 東 人 免

お母もあうねをふ思ふか
さひ他とあうねすき場
治親が深の井戸小垣は
城を忘るゝ猫もあす
雛おひ婦乃見小に
これくさあう小神か
後のきれと乃斬る人
あうねをこま東坂

人 免 東 人 免 東 人 免

永くをあれよ呼んで喰ふ杖
 意を好あれと下され仙人
 其意をいふと都小致居る
 外明海も破さるるあり
 一歩の杖より起れるは此法
 立てていふや馬小毛纏
 有る小月うすくとい川白
 久しなり秋の名を風まふ

東 兎 人 東 兎 人 東 兎

菊を扱ふる形ふ了乃声
 咲の海うもあはれ物寄ふ
 秘じ事の葉とりくは杵の香
 孫をおもはる庭の枝々
 親すれどもあはれつゝ一語さや
 独語やうゝはさきも禁も

東 兎 人 東 兎 人 東 兎

六日

さいきのむく起蟻—今朝北風
 山乃嶺を越えぬのりく神
 月小星竹は雀乃幕赤く
 生綱さくし秋後のいそひ
 うきおめ早知れ凡の思くめ
 荒乃陽子小古の年おろく

し甫 伯免 昉囊 甫免 囊

や—はくちておし—柳耳反
 ちみくくんと売れおく
 うき時々火種を虫のかくと里
 さくやく後のいさよふれ固
 雪具の似るう—ふ弛をう
 瀟々すのそ秋のを咲
 山内風の智恵もひきも小長刀
 征く—あふ大もを

甫免 囊甫 免囊 甫免 囊

梅ひつと越せとありて支配之
 言を聞きし小仕女は使に
 寄るまゝ月小をひくと云々
 梅子の梅子小癖て居る
 ちのつゝとこれ機極乃ち云々
 竹植て足は茶の湯に云々
 あり子と云々漬小やれも氣を
 十六日と云々乃後日
 南 兼 免 申 兼 免 南 兼

味頃薄も枚子も寝小一不節
 母路の荷もよまて城と云
 張梅日枚の口氣を云々あり
 蟻をとりつゝと云々健屋
 而性も云々云々云々所あり
 軍書も云々云々ハ嘘
 梅子の外すゝと云々小月の氣
 麻も入るゝの尻も風欠
 南 兼 免 申 兼 免 南 兼

新きても 留も 中 秋 拂
 ち 髪 け ぬ 又 寺 乃 ち 云
 ち け ぬ 而 全 ち 保 持 ち 合 点
 ち ち ち ち ち 連 ち ち ち ち
 年 ち ち ち ち ち ち ち ち
 世 ち ち ち ち ち ち ち ち
 免 棄 申 棄 免 申

七

而 宿 小 葉 乃 ち 葉 ち 一 遍 ち
 ち 小 湯 ち ち ち ち ち ち ち
 鶏 敷 ち ち ち ち ち ち ち
 歌 ち ち ち ち ち ち ち
 二 ち ち ち ち ち ち ち
 ち ち ち ち ち ち ち
 乃 露 和 什 亦 弓 人 免 免

世を去る 燈火の宿るあゝかみ
 かみ人の志氣も絶えぬ心氣と
 お後ふたりいふをまつて
 ねれあうる福を祈や
 望の月と那夕ふ小窓に
 ひろくそとに秋風
 ながのきもむーれきと寂し
 ぬきゆ様ふ絶えろ肩衣
 宋 露 什 了 人 免 川 父宋

感怀の家ふちのさみけ
 うきをけくねとあめは根を
 ゆく今年此きハ言ふに
 けりて雲をまきく種物
 けりてふ世界をまきく足
 三味線志うれ声も二あう
 けりてと昼の森のやみ天気が
 仕合わるにふ乃托持
 川 宋 露 什 了 人 免 川

み風呂ふ入て庭うろろく
木履のきく何ぞ隙やう
かきと耳ふすせうはるを
男いりり此泥乃思を
おつ入海を新灸ききの始立て
併ちあつて只苦痛をうく
朝の月かききききききき
あふあふあふあふあふあふ

免人弓什病宋川免

思ふ子程母もい秋果れ
旅とさきう洗滌う泣
お灯ふふとて吸く田の若
隙の征報とも小成佛
英を見てあふあふあふあふ
柳の咲は八加例延年

人弓什病宋筆

八日

を無き葉の空や南を葉の
かけこゝをを相救ふ乃月
直時おぼろあけと町唄
船政す海にわし船政
葉の徒に後葉よりをを心
吹けよ松風より素直
之仲
伯免
し甫
枕妖
免
仲

八葉の中よりあけ親世を
了るしとて葉の庵人
男ふ部 船政合て素直
直すてとてわし行申けす
白の世を後子風乃者
下寺町の物騒れ沙汰
そり此ひもをを子子の恵
志ろを屏風に夢も清り
妖
車
仲
免
甫
妖
免
仲
蛇

糸をへりしふ事湯もくんと
並きこ人のふね板橋
夕暮も恨す時ふ月と暮
都の中ふ柳一本
遊ふ事かや丁乃以盡
其の近きよもや村
其の濃紙情も又けり
まゝの好し細工食之

妖 甫 仲 免 車 妖 免 仲

新化時小町をあつるお露月
るかゝるて候を約め
法系やうに相手ををあらん
想ふ下りてもかきこ
新起の舊丸あれとほり
今此車の事ふ新あり
月新も事ふ隠きう取れり
房の糸此事ふ新あり

妖 甫 仲 免 車 妖 免 仲

あふ名の二葉小井戸の草を
僕の声に平しと実を
冥世小法縁を張ふ吾乃徳
あふ物のあはれは偉大れ
いふも其の法は乃思はる
苗代を好む我をる

妖甫免仲甫妖

九四

名月や三幅對ふふ乃葉
猿のけくふ定ふも葉
川名の時ふ小秋乃叶ふて
猿ををいよあめ物あ
大子ハハといてう侍授あ
焼火てうはく院定の歌
人免冬朴人伯免

里冬

鏡のまへに雪は降るぬ拍子ぬけ
天ちとてまふ人ぬれも橋
輕くとも勝架海をくれば夜は
拾ふくぬ伯母よまの毒
歌をよめふ屏風をうつまを
待ね心小あふく月歌
おきと八振ふ名をまき言け
子孫の白く此廣きと科

冬 人 冬 人 冬 人 冬 人

仲人も足はあふ多くて
比丘尼のあふと秋歌ぬけ
まの戸をひらきあふ余に
不く一歌を足せぬ
まふては風ふちくま乃雪
おまの橋ふ秤つり
心くつめの女房小松はけ
まふの併ちよはて

冬 人 冬 人 冬 人 冬 人

うはちをひくも度にもなる
中葉居るももまを大切
湯風呂に敷きあげてあふ
来遠の時を杖もいぬ
月菜の次子小柄を思ひ
まゝ一生壁ふ夕月乃新
とくても死なぬかぬと憂
盆の掃除を親へしむ

人 免 冬 人 免 冬 人 免

肌ぬけて寝て人小あふ
伴物の方より小あふ
まの根をぬき干す
葉の白く小あふ
和装小あふ
雪と雪小あふ

人 免 冬 人 免 冬 人 免

十日

菊は梅友のいさぎや若供養
句陽は信小月も瑞陽光
おかしきくさふ秋や加あふ
机小尖泳膝のさうーこ
芝金もねう吹ちるこ下風
お梅も歌ふをき川舩
宇中 伯免 播東 中免 東

嫁へくし来もきぬ家魚へ

八卦小年をいふもうと

樂金く細乃流平法華寺

廣い壁小い小も御云領

今更小更鷹のあるも四月と

蘇子とむするこち北側の

昼るの神と一白小流あれて

若小吹了く加賀の金沢

中免 東中 免東 中免 東中 免

廓がく矢多村がなる英軍
思ひくふは新供の幕
まの月めあつてもみ而あ
燕もは新仲の悦くら
張益の衣履とたふ二人はれ
の星う系全てすゝあきう
むゝふふふふふふふふ
洗をきくおるは持佛

東 中 免 東 中 免 東 中

ふふふふふふふふふふ
橋をぬく他国とふふ
月代のふをおふく夕涼
時を帰る末乃初和
ふふふふふふふふふふ
隠居ふふふふふふふふ
ふはの辰を脈ふふふ

免 東 中 免 東 中 免 東

八つれえといふ金銀物なりけ
 漢小綱乃あしとおろや
 さる蔵ておろる娘を惜まそ
 焼味噌好の京の客人
 二石のちから茶の芽も咲き
 綱のさくらふ雪乃梅
 中 免 東 中 免 東

追加序

佐むかりていひ申小あそびてくめて
 蓮二房小りてあされ梅幸ふふ笑の
 交をむすらうとさうにふと平の先
 ある角——今年ハこぶ小松の人て
 小僧されて葉は湯中られ名をかりて
 いふ多分のまゝといふあつぬちうたを
 金銀の二子とくういふ時の茶れあそび
 しょう二と形の文を屋をさうなうり

けちち蒼つ小付つてを獲、湖東の
葉何佛也とてを葉小一句の秋
あつて湯盤のいすゝあとなゝハ
風物小思ふ新古をたてを葉の
エ文とハすゑ——されを蓮二房小
二葉二月の式をゆゑをれてけ葉の
名葉をかゝるんより水くみ白月乃
月北古法とありてけ十葉仏の時を
志とさるんや

共鑑

葉のちぬけとてを葉し二尺形 一乃子

葉のちぬけとてを葉し二尺形 伯免

十葉のちぬけとてを葉し二尺形 房

十葉のちぬけとてを葉し二尺形 播東

十葉のちぬけとてを葉し二尺形 昨義

十葉のちぬけとてを葉し二尺形 琴十之

日窓てそ心より痛つ起川
 相傳ふ傳ふ又相氣をふ
 手のくふおかしきう胡麻を
 花つておしる程より長きよ
 蓮花の宵はうかぬ棚より上
 今よりやぬき種は中柿
 数里も伝はふ處る遠く月
 水の国もあるす南窓の風
 房 東 棄 之 免 房 東 棄

只一ねおされし 啼 鶯 之
 源平よりも悲はるるて次
 みおの澄海より海はこれ実
 けと程を移しよとて
 十年の工事も定よみつて
 千代もわふ代を撰集乃と云
 房 東 棄 之 免 房 東 棄

千
 十
 九
 八
 七
 六
 五
 四
 三
 二
 一

机石

種をのふくさねもふれを
ふれをふれすてふれふれ
支考

東京系 三五年

又佛の集乃阿くくや果合
百果元都もももまふ路ふ
果より名を果うまふて都ふ
吾仲
免史

後の夢のせうにちやや張る
 通函のそとに居る後
 多うれいさな顔や梅は
 うきうきめ世やうきうきめ
 梅の火や顔小あつて二
 ちよとの我をわくわく火
 侍かひ月小ふりや冬の
 けしきとも併もあつて
 李沈
 水甫
 杜草
 松有
 天止
 衆碩
 騏及
 詞丸

蝶舞やあつてかたがうに
 うふ乃甲紙細工して海
 抱いぬ伽丁うきうき
 帆の腹る腹てふあやう
 めはあつてうきうき
 海はうの秋乃のあやう
 尾城
 八菊
 七由
 房

教寺乃の秋乃のあやう
 露川

洛陽

以飲也食亦不之爾病也
得金の種不之也亦此香
系下也の咳不之也時為家
走一之者意の種然不之也
得金の種不之也亦此香

吾仲

范寧

了阿

東伍

倩兒

大津

得金の種不之也亦此香

尚白

成之玉は小海にありて
時ありて玉一玉を手に
之月偏に光るを天の
玉の光にありて天の
天の光にありて天の
光にありて天の
光にありて天の
光にありて天の

全

維明

庸山

大和

表立

圓入

扣角

才陀

又濃

第む小鼻の如き神履これ
鼻はうゝ袖うて半の袖髪
重なるをいふ年ハ悟る所を
意匠の空さもある大蛇も
高のうねる尾ひさやをい
木の葉もいふ葉もいふ
妙のなるや子屋乃ふれ夜

木因 右範 野航 馬岐 六之 莫次 東羽

びーあるを改めあつて金式
いふいふてむふ種や勝月
コすきいれ戸あき君隠のひささ
紙帳いふ大書あけて床言ハ
推め突めかきうと祿元忍河バ
そのいれいゝり作や梅乃也

越後

又ちいふ母芳茶小き一の也

二竹 景雙 菊伍 童平 代重 同如 陸夜

城中 井波

夕顔やうつくしき里の河を思

桃化

西月も喰ひ流しう梅の花

林紅

魚津

名々の初もたあふり串子うれ

秋幽

草を煮るいせや我よりよの月

倚表

十六夜の雲れとあや味ひう

雨村

城端

小男麻や一葉あかひて丸木橋

吾秋

杉舟よりいしとやうに葛袴

其月

早ふよりこけと涼しき雪の華

支六

七夕や合おももてて俄に

仙在

福光

後美うしつれなうれあはれを

巴全

あしこもる夜をよめて紙帳に

呂仙

はるも焼く河をる雪を雪に

舊雪

こりくも念ふくしゆり此并
まろくも比ふもあひるを桂
あつ師の筆は新しき時あ

曾由
梅地
音吹

石動

松しや松よりよみ果の寄
極糸へはふまうそて火焼くれ

宇白
方堅

かかえ
金沢

耳の底は一面ああり虫のあ

北枝

系小段の蝶立をわぶむ此う
和丁やあふぬはあふ尻よりあ
系物よのせて海をそとあし
何よりあふやあふる乃て
横手の系小段あれ柳哉
金をあふ心てあふる牡丹

秋晴
万子
徒吾
如松
孤舟
方石

小松

紙一とあふる世話の紙打花

宇中

秋の夕もささくうきく月れく	金持の侍あふゆき	尾をわいて足さるる森の若北条	苔まき切や水もささくはまはる	田舎をちろとさへれて花さ
之仲	之川	乃露	尔弓	只三

春元	和什	昌柯	文宗	夕市	イ人	心申	桃妖
花つ起川お心あしむお蝶	志別くし風小柳や一川橋	深みれて花さるる藍さるるけ	白藤ふくしむち深きさるる時を	夕立の遠乃をゆき藤骨く	さるる花をいひけりや秋の蝶	夕凡や垣根をさるるさるるけ	

戦前

数々

お伏し吹や言風を丸あり

東怨

新法師もいそふ寐ころか夜を

佳木

ちうてさく南門の御蓮れを

凡虎

立寄て下戸も上戸も清みぬ

東吾

小春やおひそ言て心は

三志

摺小春もいそふ雛のふき

凡士

無のふきいそふ雛のふき

岸水

地雪ふ解金の門乃柳のれ

既白

弱大や膝もあそふ足絆れぬ

荷翠

鶴頭やふきふふふふふふ

霞亭

名月や野も色く人乃新

拂袖

多ふふも咲や伏えの枕れ

可伸

首中

名月や一ふふのふを

嵐枝

同おふふや鬼をまつすふ

不ノ

福井

加まきうわいふふん延以負朽し	川鴨も侍るも手鼻の南	系久たを井戸小歌くや鶴歌を	地陰乃肩も芥や父名	雪此小富くさひや極乃梅	人きりし七りしもあき思さへ	の年ひそ小来て居た鹿の乳
章吹	子園	岩芝	布六	龍枝	青波	山只

三金

猪乃びきり梅修く妻う那	長閑く守乃牡丹の折人乳	何おのふ而合乃に歌や漆	新歌や約瓶の棹乃木を人様	むういふく見るもきりし舟	晴小鳥を晴しね雪吹の菊	摘妻や坊主をさるる長縄子
昨彙	播東	愿角	琴之	北竜	右々	布留

百栗莊

梅はくく二仲の中北涅槃うぬ 伯免

訪確坊

悟れとの確もあり裸麦 涼菟

確も秋の合点あり確北菖 房

涼菟は交裸の二字を所 蓮二房
よき等の二句を本よりしもあり確坊
乃東居ありしう今もそを結

乃東は金かうて共よむじやう
あはれとななり

確の夜明や夏も新ろ霜 伯免

二つはあ

おのろいんを風乃木の葉哉 房

千一曆の末の
初日



東京市立沼下町
野田池会館板

天
下
第
一
等
事

天
下
第
一
等
事